

『私に保育を教えてくれたこどもたち』

著者	清水 玲子
著者別名	SHIMIZU Reiko
雑誌名	ライフデザイン学研究
巻	8
ページ	7-8
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00010316/

『私に保育を教えてくれたこどもたち』

清水玲子

1. 初めて出会った「こども」…初めてこどものことをもっとわかりたい、もっと学びたい、と思わせてくれたMちゃん

卒業論文のために、自閉的といわれている6歳のMちゃんを研究所の先生の許可を得て観察させていただいた。当時（197年代初め）、注目されはじめていた自閉的な傾向のある子どもについて、教科書で学んだとおりに、山手線のすべての駅名が書けたり、えんぴつをほんの少しの長さの違いも見逃さずに順に並べたりしたのを観察し、記録し、これが自閉症なのだ、と納得した。そうして書き上げた論文の口頭試問のとき、ご高齢の偉い先生が、やさしく、「その子は、自閉的という特徴をはずしたら、どんなこどもなの？」と私に質問した。私はまったく答えられなかった。私は、その症状の特徴に夢中になり、Mちゃんそのものを少しもみようとしていなかったことに初めて気づいた。表情をあまり変えないMちゃんの気持ちはほんとうはどんなだろう？子どものことをもっと知りたいと素直に、しかも強烈に思わせてくれたMちゃんだった。

2. 研究所の会議室を借りて短時間の保育をしていて出会った2歳のおしゃべりがとっても得意なのに友だちにすぐかみつく女の子…なぜこんなに話せるのかみつくのだろう？

卒業論文でお世話になったのがきっかけで、研究所の先生と、保育者もまじった仲良し(?) 4人組ができ、2歳児というこどもたちをよくみてみたいね、ということになって始めたのが2歳児の3ヶ月ごとで終了する子育て教室のようなものだった。

あるとき、とてもおしゃべりのじょうずな2歳の女の子が入ってきた。その子が友だちをよく嘯むのである。ことばがこんなに達者で、自分の言いたいことをどンドン言うその子がどうして友だちを嘯むのか、不思議だった。たいてい、まだうまくしゃべれなくて伝えきれないから嘯むことが多いのだと言われているのに、この子はそのケースには該当していない。私が防ぐ係りになったが失敗し、彼女はますますすばやく嘯むようになった。

でも、みていると、自分はきちんと言葉で伝えているのに、友だちはそれについて来れないので、やりとりがやはりうまくいかず、いらいらしてしまうのではないかと見えた。そうか、言えなくて伝わらないいらいりだけでなく、相手がついて来られなくてわかってもらえずいらいりするものなのだ、と初めて気づかせてくれた女の子だった。

3. 4歳の女の子たちとやったかるたとり（詳しくは「育ちあう風景」ひとなる書房収録の「あゆちゃん」）文字の読めるあゆちゃんが、読めない子に読み札を先に読んであげるため、あゆちゃんだけがたくさんかるたがとれてしまうのに、つかつかとして対抗意識を燃やした私とずるいと思わないほかの4歳児たちのギャップから学んだこと。

4. 「もっと知りたい、もっとわかりたい」と思ったら「自分で試してみる」ことしか思いつかなかった私の「研究」

例：「乳児は愛着関係のできた母親と離れたら幸せではない」ってほんとうだろうか？

→ 赤ちゃんを実際に見てみたい…都内の無認可保育所に辿り着いてまったく知らないのにひたすら頼み込み、数ヶ月間、赤ちゃんたちを家まで追いかける

例：乳児保育に「ならし保育」というものがあると初めて知って、乳児はどんなふう慣れていくのかみてみたい→ 大きなふろしきをかぶって我が子にみつからないように観察する

***** でも、それには限界が *****

5. 本当に保育を研究するには保育園で自分も働かなくてはわからないよなあと思ひ…悩みつづ、せめて実際に保育をしている人からたくさん話を聞いて学ぼうとする。→ そこで、いくつかの保育園の先生たちの研究会に出会い、何人もの私の人生を変えるほどの貴重な先生たちに出会って、それぞれの保育園の子どもの姿と保育の姿、実際の悩みをくわしく教えていただく機会がふえる。

6. そうしてわかったこと

* どんなちいさな保育の話でも、話しあっていくと必ず学べる子どもの姿があり、保育の課題が出てくる。保育者はみんな私の先生なのだ！

* そのことを整理してまたみんなで考える材料にするのが私の担当。保育現場のことはわからないのだから保育園の先生たちに聞けばいい。そしていっしょに話し合い、考え合えばいい。その営みが保育の研究そのもの。そして、私も保育の研究の仲間として入れてもらえばいい。(保育園の先生たちに、私の居場所、役割を教えていただいた)

* どの子もひとりひとり、自分がどんなときでも大人にも友だちにも愛され、認められた存在であるという深い安心感を持ち、毎日を夢中で暮らし、育てていく権利がある。おとなはそれをどの子にも保障すべき。認められている大人でないと、こどもにそれが保障できない。

* こどもの育つ力を信じること。こどもは理不尽なことをはっきりと感じとるし、大好きな人たちのために心を砕く。こどもから学べばいい。…ひとりでは学べない。よけいなことを気にしないで話すこと、考えることができる大人たちのあり方が大切。

* こどもはほんとうに精いっぱい生きている。こどものうんと近いところでその「精いっぱい」に応えようとがんばっているのが保育園の先生やこどもにかかわる仕事をしている人たち。すごい仕事だと思ふ。ほんとうにたいへんだと思ふ。でも、そこからしか得ることの出来ない充実感、幸せというものも大きい仕事。だからその悩みは貴重。こどもをほんとうに大切にしていこうと私もういっしょに探し求め続けたい。

2013年1月22日に朝霞校舎314教室で行われた最終講義の抜粋（本人文責）。